

私が海軍に在籍したのは昭和十年四月から二十年十二月までの十年八ヶ月で、十九歳から二十八歳までの正に青年期であった。長い今日までの人生の内でも最も思い出の多い期間でもある。

昭和七年に日支事変が起こり、日本は急速に世界の孤児への道をたどり始めた。

当時の日本は慢性的な不況に悩まされていた。その原因が、公平に分配されるべき天与の資源が一部の戦勝国に依って独占され、ブロック経済政策などにより我が国がそこから不当な締め出しを受けているからだ。当時の誰もが思っていたからである。このような既成の世界秩序を打破して各民族が共存共栄できる新しい秩序を創るためには戦争も辞さないと言う風潮が日本を支配し、日本は不幸な戦いの道へ歩み始めていたのであった。当時、ヨーロッパに於いてもドイツやイタリアで同じような思潮が興り、世界は第二次世界大戦という不幸な時代に突入しようとしていた。

今にして思えば、貿易や資源の配分に関する国際社会の仕組みの未熟さや不完全さのなせる業であったと考えられる。

そうした社会情勢の中で十九歳の私は江田島に渡ったのであった。

海軍七十年の栄光に輝く歴史を継承し、祖国のために戦う中心的役割を担う海軍士官を養成する海軍兵学校の教育は厳格にして充実したものであった。そして、教える者もこれを承る者も高い誇りを持っていた。

至誠にもどるなかりしか 言行に恥ずるなかりしか

気力に缺くるなかりしか 努力にうらみなかりしか

無精に亘るなかりしか

毎日 五省を唱えて内省しながら学業に訓練に精進した三年六ヶ月の歳月は、正に聖天地における自己陶冶の日々であった。

広島県三原の佛通寺という禅寺に指導教官の松本中佐に引率されて、クラスメートと共に参禅したのは二号生徒になる前の春休みのことだった。

当時、関西随一の高徳と言われた管長の山崎益州禅師の死生観という講義を聴くためであった。一朝事ある時は一命を祖国に捧げる軍人として、死の恐怖を超越できる修業が必要と思っていたからである。

春まだ早い山寺の底冷える朝、がらんとした広い畳敷きの講堂に、三十人が剣道の稽古着姿で正座し講師の入場を待った。先ず、元広島文理大学哲学科の教授が仏門に入り雲水となった藤井虎山という人が一時間半ほど講義をした。死について哲学的な角度から考証した話は実に面白かった。次が益州禅師の講義である。藤井虎山級の雲水でさえ私どもの心を打つ話をしてくれたのだから、禅師は一朝にして死の恐怖から我々を解脱させてくれるであろうと期待して入場を待った。

しばらくして、立派な衣で正装した禅師が温顔にこやかに入場してきた。その温顔に打たれしばし寒さを忘れたのであろうか、部屋が急に暖かくなった思いがした。そして、私どもの前に端座した禅師は静かに口を開いた。「昨夜は三里の山道を登って当山を訪ねてくれて御苦労さんでした。拙僧は皆が来ると言うので、雨の降りしきる夜空を眺めながら、もつと降ればいい、もつと降ればいいと思っていた。若い頃の苦しみは買っても苦しめというが金を出さずに苦しむことが出来る事ほど有難い事はないから」と言った調子で始められた。それから禅師の若い時代の難行苦行の話が延々と続いた。藪の中で裸のまま座り蚊にさされてかゆい処をじつと我慢し通した話や、極度の暑さ寒さに堪え抜く荒行を通して不動の平常心を養う行の話などであった。正直なところ坊さんの説教としては並の中ぐらいとしか感じなかった。

そして、最後の死生観の話に入った。禅師は言った。「死とは息の止まる事である。これは何人も疑う余地のない事である。人は息を吸いそして吐き出す瞬間には息が止まっている。これも疑う事が出来ない。人は誰でも一分間に十七回乃至十八回死んだり生きたりしている。「これも禅師の論法から言えば正にその通りである。そして、禅師は次に驚くべきことを言った。「それが何かの間違いで息が長く止まると死んだといつて、にわかには驚き、悲しむ。私にはその気持ちかわからない。死とは息の止まる事である。そして、又生き返る。」そう結んで禅師は立ち上がり席を去った。ものの三分とかからぬ時間の出来事であった。

私どもは哑然とした。そして、次の事に気がついたのである。死とは息の止まることで毎日くり返され、生き返っている。仏教の輪廻説であろうか、禅師は知識として知っているのではなく信仰として信じきっているのである。だから死について他に話がないのである。ただ知識だけを追う世界にいる者には藤井虎山のように一時間半に及んでも尚語りきれない話がある。而も死を知らないのである。禅師がそうした信仰に到達したのは、死を恐れおのきつつ、難行苦行を重ねて、はじめて到達し得た境地なのであると言うことだった。我々は信仰の力の強さに感動し、立ち去る禅師の後姿

を拝む思いがしたのであった。

数年前五十年振りで佛通寺を訪ねたが山崎禅師は無論なく藤井虎山当時雲水が管長として居られたがあいにく御不在だったので逢うこと事が出来なかった。伽藍改築の瓦代を納めて去った。

強弱の差こそあれ、誰でも経験する青年心理後期症状は、私の場合二号生徒の時に到来した。

過去に教えられた一切の価値に対して深い強烈な懷疑が生じ自分を苦しめた。

「一つ 軍人は忠節を盡すを本分とすべし」と朝な夕な唱える軍人勅諭が先ず分からなくなった。苦しきのあまりある日、分隊監事の島田少佐に「教官、私どもは何故陛下に忠節を盡さねばならないのですか」と尋ねると、あつ気にとられた様な顔をしてまじまじと私の顔を覗み込み語ろうとしない。答えられない教官を見て頼るに足らずとして、その答えを得るために自習時間は図書館に通い、倫理書・哲学書・仏書等を手当り次第に耽読した。大内晴覧の仏書や東洋のカントと言われた西信一郎博士の努力の哲学を読んでいるときは心が静まるのを覚えた。

図書館ではよく近くの席で、後に海軍大臣となる、校長の及川古志郎中將が大蔵經の大巻を刻銘に読破していた。人生の目的とは、自分とは・分らないことばかりが自らに迫ってきた。所詮容易に解け難い疑問に苦しみ、ついに、校長に苦境を打ち明けると「そうした苦しみは決して妥協してはいけない考え抜きなさい」と言ってくれた。

好きな剣道のほかは訓練にも身が入らない日々が続き、上級生からは白眼視されるようになっていた。そうした私を、後にシドニー湾攻撃で特殊潜航艇に乗込み十軍神の一人となった親友の中馬兼四君がいつも傍にいて「貴様どうしたんだ」と心配してくれたが私の苦しみは収まらなかった。

読書に耽った歳月が確かに自分の思考力を深め、知らなかった世界は拡大されていた。しかし、病的な懷疑の答えは容易に得られない。「知識には自ずから限界がある。体験を通して別な角度から物の価値を見てみよう」と考え直すようになり、ようやく心のやすらぎを覚えるようになった。わずか数ヶ月の苦悩の月日だったが、その間、励まし、或いは教示してくれた先輩や知友のおかげで物を見る力が画期的に広がったことは有難いことであった。そして、海軍兵学校が硬直した軍国思想一辺倒の世界でなかったことを、誇るべき教育機関であったことを伝えておきたい。

卒業と同時に海軍機関学校・海軍経理学校のコレスポンドと共に練習船隊「出雲」に乗り込み、宮中に参内して天皇陛下の拝謁を賜り、満州・台湾の内地航海を終え、南方方面の遠洋航海にのぼり、昭和十四年少尉に任官して第二艦隊七戦隊の最新鋭巡洋艦「利根」に配属となり艦隊勤務に従事した。

少尉として艦隊に配属になった頃、中国では満州中支に樹立された親日政権と英米の推す蒋介石政権、及びソ連が後ろ盾の中国共産党政権の間で内戦が続き支那事変は混沌としていた。海軍の主力連合艦隊は内地にあって、月火水木金の猛特訓に従事し、満を持して有事に備えていた。この頃の海軍軍人の間では海上勤務を誇りとし、陸上勤務は潮気が抜けるとして嫌われていた。

軍事訓練の間には国策に対する議論もはげしく取り交わされていた。国際情勢が緊迫していた中で、航海長小沢少佐は、私にこう話してくれた。

「日支事変は陸軍主導で実施されている。海軍は陸軍の大陸政策には必ずしも賛成ではなく、そんな戦費があるなら蘭領印度支那を買収すべきだという考えが強くある。これが海軍の南進論だ」と語っていた。

二分隊長の小西大尉は「陸軍はドイツ・イタリアとの三国同盟の締結に熱心だが、山本五十六長官をはじめ海軍はこれに反対である」とはなしてくれた。休養地に入港すると小西隊長はしばしば私を連れて「憂国同志会」という会合に参加した。大佐・中佐・少佐・大尉と階級は色々だが十五名前後の将校が料亭に集まり国家を論じ丁々発止の議論に夜を明かすのである。私は酒を酌み交わしながら語り合う真剣な先輩士官達の外交・経済政策の議論に耳を傾けながらまんじりともせず夜を明かしたことが幾度もあったことを思い出す。

十四年暮れ近く、連合艦隊は後期の訓練を終え別府に入港した。海軍人事が行われる時期で連合艦隊長官山本五十六大將は司令部総長に転出し、豊田副武中將が昇進して連合艦隊長官になるというのが専らのおわさだった。しかし、山本司令長官は連合艦隊に留まった。三国同盟に反対する山本長官を陸軍の少壮将校がねらうので最も安全な海上に留まらせたというわさが艦隊内に流れたのもその頃だった。

その暮れが押し迫った頃、私は南遣艦隊に転出を命ぜられ駆逐艦「春風」に乗り組み海南島に向った。冬の台湾海峡は波が高く難航海であったと記憶している。

英米の蒋介石政権に対する海上よりの武器援助が増大され日支事変が硬直状態とな

り、南海封鎖を強化する必要に迫られていたからである。

私どもの第五区艦隊の守備範囲は上海より広東までの長い区間だった。夜陰に乘じ、或いはジャンクを利用し隠密裏に援助物資を陸揚げする英米の行動を阻止、敵性ジャンクの掃討、親日地区への蒋介石軍の攻撃阻止作戦など任務は重かった。泉州湾作戦・タックツ島掃討作戦・シモン湾封鎖強化作戦・南オウ島作戦など、ある時は陸戦隊中隊長として、ある時は徴用船「天山丸」の指揮官として戦闘に参加した。幾度か死地に入ったこともあるが、戦場心理に突入した時の戦場での指揮官の責任の重大さ、そして、部下を統率することの難しさなどを直接体験することが出来た。

この時期、私が仕えた指令は、後にガダルカナル進攻作戦で二階級特進し中將になられた佐藤康夫指令であった。「俺は若い頃、司令官の五藤存知大佐から頭脳雑駁にして勇敢なりと考課表に書かれた」と大笑する豪傑だった。清水湊生まれの佐藤指令は時折行われる佐官の宴会で必ず「仁義すごく丁半かけて」と調子外れに歌い出す。いたずらざかりの少尉の私が「今日は私が歌います」と言って先に歌い出すと満足そうに聞いていた。「航海士 君は俺が何故この歌を歌うか知っているか」と突然聞いて来た。知りませんと答えると「何時か米国と戦争が始まる。今度の戦争は無傷ではすまない。戦争がはじまったら俺は駆逐艦を率いて、やるかやられるか敵艦に向って突っ込み魚雷を打ち込む、博徒が丁半かけるように」と決意に満ちた表情で言った。

先輩佐藤指令は酒席の間にも戦いへの準備をしていたのである。後に聞いた話によると佐藤指令は言っていたように、スラバヤ沖の海戦で敵の旗艦「マールヘッド」に突入し、魚雷を打ち込み、わずか七分で轟沈させたと言う。

そして、佐藤指令は陸軍のガダルカナル島撤収作戦という敵の制空権下で最も危険な作戦に自ら名乗り出て参戦し、陸兵を概ね収容し帰途についたが「見張り役がまだ残っています」との報告で引き返し、敵戦闘機に捕捉され爆撃を受けた。指令は傾きかけた艦の上から全員退避の号令をかけ、自らの身体をマストにロープで縛りつけ、中天の月を望みながら艦と共に波間に沈んでいったという。

昭和十六年九月、連合艦隊に転出になった私を南遣艦隊に残った佐藤指令はいかにもうらやましそうに「俺もあとからいくからな」と大きく手を振り送ってくれた。

今も、あの朝の南支那海の光が強烈に私の目に残っている。

再び連合艦隊に戻った私は、第二艦隊第二戦隊四旗艇航海長として着任した。着任して早々の頃、松原艦長から連合艦隊の図上演習の審判官として連合艦隊旗艇に来艇する様に指令された。そして、その折、知りえたことは何人にも一切口外しないようにと特別の注意が加えられた。実戦さながらの演習であったが宇垣参謀長の山本長官

への報告に対する山本指令長官の戦術判断の鋭さには流石と驚嘆したのだった。

夜を徹しての演習が終了すると、松原艦長は必ず艦橋の休憩室に閉じこもり入口に「大臣・総長の外面会謝絶」と貼紙をはった。いま行った演習の分析し報告書を作る為であった。松原艦長の報告書は第二艦隊でも有名で後年の水雷戦術の向上に多大の貢献をされていた。休息日には船尾で釣り糸をたれ大公望をきめこんでいる姿をよく見かけたが、後に、高い精度の敵の電探攻撃に敗れたルンカ沖夜戦で、敵の駆逐艦をアウトレンジしながら追跡して、砲撃する敵巡洋艦に向って急転回し、正確な魚雷攻撃を加え敵艦を轟沈させ味方を救った松原艦長の独断専行の戦術はこうして作られていたのである。十二月八日開戦となるや南方戦線に進出したが、この艦長とも自らの病により別れねばならなかった。

病院船朝日丸にて内地に帰還し呉海軍病院に入院、失意に沈んだ病名は胸膜炎だった。退院・転地療養の後、再び軍隊に戻ると戦線は拡大し、後続部隊の教育が重要になっていった。第一線には加わることが出来ず、霞ヶ浦、武山にて予備学生の教官、浜名にて海軍技術見習士官の教官、最後に防府の予科兵学校教官として勤務中に終戦を迎えた。わずか十年の海軍生活だったが、幾多の先輩や同志にめぐまれ、苦しみながらも非常時に生きたこの期間はある意味で最も充実した時期であったように思う。

海軍とは私にとって何だったのかと訊ねられたなら「どんなに苦しい場面でも、させまつた場面でも物事の真の価値とは何であるかを、一歩退いて考える習慣をつけさせてくれた社会だったと思う」と言う。

本稿は、遺品のノートに書かれた原稿を、西野好海が整理したものである。

西野 恒郎は三和システム(株)元会長

平成十八年十一月没

旅笠道中

歌 東海林太郎

夜が冷たい 心が寒い

渡り鳥だよ 俺等の旅は

風のまにまに 吹きさらし

風が変われば 俺等も変わる

仁義双六丁半かけて

渡るやくざのたよりなさ

亭主もつなら 堅気をおもち

とかくやくざは苦勞の種よ

恋も人情も旅の空